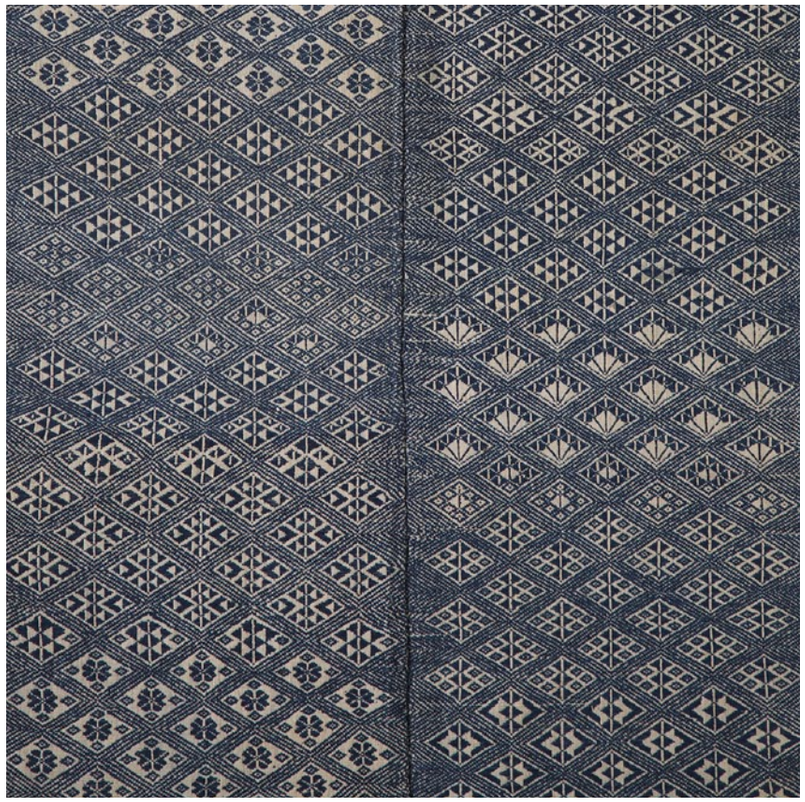
カンタと刺子

―ベンガル地方と東北地方の針仕事

2014年9月9日(火)－11月24日(月・祝)

日本民藝館



〔写真〕上・カンタ　儀式用布（部分）19 世紀後半　旧ベンガル地方　岩立フォークテキスタイルミュージアム蔵／下・菱刺衣裳（部分）　明治時代　南部地方（青森県東南部）　日本民藝館蔵

1	2	3
4	5	6
7	8	9

1. カンタ　儀式用布(部分)　19世紀後半　旧ベンガル地方
2. カンタ　子供用布(部分)　19世紀後半　旧ベンガル地方
3. カンタ　婚礼用敷布(部分)　19世紀後半　旧ベンガル地方
4. カンタ　儀式用布(部分)　19世紀後半　旧ベンガル地方
5. 刺子袖無半纏　大正時代　山形県庄内地方　丈76.0cm
6. 胴三階菱区切り刺子衣裳(部分) 明治時代　山形県庄内地方
7. ㊤あくと掛　昭和初期　山形県庄内地方　幅33.5cm
   ㊦子供用足袋　昭和初期　山形県庄内地方　長16.5cm
8. こぎん衣裳(部分)　明治時代　青森県津軽地方
9. 菱刺前掛(部分)　大正時代　南部地方(青森県東南部)

1–4…岩立フォークテキスタイルミュージアム蔵
5–9…日本民藝館蔵

開館時間：午前 10 時 ― 午後 5 時（入館は 16 時 30 分まで）
休 館 日：月曜日（ただし祝日の場合は開館し、翌日振替休館）
入 館 料：一般 1,100 円　大高生 600 円　中小生 200 円
交　　通：京王井の頭線駒場東大前駅西口から徒歩 7 分
所 在 地：〒 153-0041 東京都目黒区駒場 4 丁目 3 番 33 号
電話番号：03 -3467-4527
西館公開日（旧柳宗悦邸）：
　会期中の第 2 水曜、第 2 土曜、第 3 水曜、第 3 土曜日（入館 16:00 迄）

http://www.mingeikan.or.jp/　日本民藝館

カンタと刺子 ―ベンガル地方と東北地方の針仕事

「カンタ」とは旧ベンガル地方（現在のインド西ベンガル州とバングラデシュ）で作られた刺子をいいます。中央に蓮の花を、四隅にペーズリーをいれるのを基本とし、生命の樹や花、魚、馬、象、虎、孔雀、蛇などの動植物をはじめ、神様を乗せて練り歩く祭りの山車やハサミ、ナッツカッターなど、身辺の品々まで生き生きと描かれています。母の愛のこもる子供の絵のようなカンタ、緻密なカンタ、日常の暮らしの絵日記のようなカンタ、そして一家の幸せの祈りを込めたカンタ。どれも見る人をそれぞれの物語に引き込んでやみません。シーツ程の大きさのカンタは掛布団に使われますが、今回展示される念入りに描かれた絵画のような品は、婚礼や儀式のとき床に敷かれ、花嫁や花婿、参列者が周りを取り囲むように座ってそれを愛でます。小型のカンタも儀式の敷物などに使われました。

旧ベンガル地方は、「ダッカのモスリン」の名で知られる、極細糸で織られた良質の綿織物の産地です。当地の女性たちは朝一番に家の戸口に、アルポナと呼ばれる神様を招き入れる吉祥文を米粉で描く習慣があります。カンタは着古した木綿の白いサリーや男性の腰巻を4–5枚重ね、基本は藍で染めた青糸と茜で染めた赤糸で絵模様を刺繍し、模様の周りの余白部分は、白糸でさざ波のように細かく刺し埋められます。

一方、日本の東北地方の刺子には、青森県の「津軽のこぎん」「南部の菱刺（ひしぎし）」や、山形県の「庄内刺子」などがあります。「津軽のこぎん」は濃い藍で染めた麻布の経糸を白の木綿糸で奇数に糸目を拾い、「南部の菱刺」は、薄藍の麻布に紺の木綿糸で偶数目に拾って菱模様を刺します。どちらも仕事着などに仕立てますが、「菱刺」のなかには、派手な毛糸を何色も使った前掛けもみられます。

庄内地方では、北前船で運ばれた、京阪で使い古した古布を3–4枚重ね、升模様や杉綾など幾何学模様の刺子を施し、その上からどっぷりと藍で染めた半纏などがつくられました。足袋や足首を保護するあくと掛や子供用の小さな足袋にも刺子が施され、保温、補強にとどまらず、それらはいつしか美しい模様になり、雪国の暮らしに潤いをもたらしたのです。

ベンガル地方の白地に華やかな色彩のカンタと日本の東北地方の藍染めの刺子は、一見かなり違った印象を受けますが、どちらも普通の女性たちが5–6歳のころから習い覚え、ひと針ひと針、時間をかけて刺し綴ったものです。自由に服や布を買えない貧しさのなかで、手に入る古布に家族の心地よい幸せな日々を願って模様を刺したベンガル地方と東北地方の女性たち。厳しい生活にあって、その手仕事は慰めでも喜びでもあったことでしょう。

インドの布の蒐集で知られる岩立広子さんが初めてカンタに出会ったのは、1970年代インドに通い始めたころのことです。泊まっていたカルカッタの友人の古い家に、上品な婦人が持ち込んだ一枚のカンタ。白くて柔らかく、色調も他のインドの布とはちがい、まるで泥田の中の白鷺のように美しく、これこそ自分の求めていたものだと感激されたそうです。

この度は世界でも類のない岩立フォークテキスタイルミュージアムのコレクションから選りすぐりのカンタ約70点と、日本民藝館所蔵の東北地方の刺子約60点を併せてご紹介します。遠く離れた二つの地域の針仕事の世界をご堪能ください。

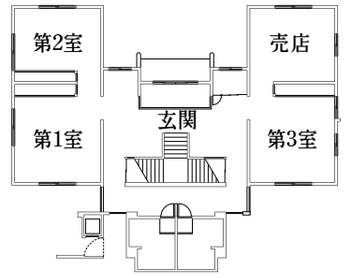
出品協力・岩立フォークテキスタイルミュージアム

記念講演会　Ⅰ．**ベンガルのカンタに出会って**
10月11日㈯ 〔講師〕岩立広子（岩立フォークテキスタイルミュージアム館長）

Ⅱ．**手仕事の国・東北の刺子、こぎん刺、菱刺**
11月 1日㈯ 〔講師〕濱田淑子（東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館参与）

※ともに18:00–19:30　料金・300円（入館料別）　定員・100名（要予約）

展示室1階



〔玄関〕日本と中国の染付磁器

白磁を素地として、呉須（コバルト顔料）を使って文様を絵付けした染付磁器。凛とした気品と涼やかな表情を宿す日本の古伊万里、そして日本の茶人たちが中国に注文し焼かせた、自由奔放な文様と器形が魅力の古染付などを紹介します。

〔第1室〕日本の漆工 ―漆絵を中心に

草花や吉祥文等を朱漆や色漆を用いて施した「漆絵」。当館では椀、盆、箱類などを数多く所蔵しています。その魅力は工人の反復により模様化し活々と描かれた絵にあります。時に願いを込め暮らしを飾った「漆絵」の優品をご紹介します。

〔第2室〕日本の諸工芸

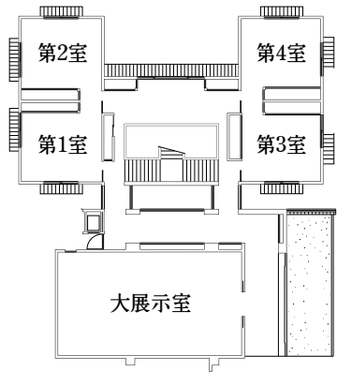
日本各地で、生活を彩る様々な工芸品が生み出されてきました。囲炉裏で用いる自在や横木、商家の看板、千石船で使用された船箪笥、鉄製の瓶や釜、ガラスの重箱や蓋物など、用に即して生まれた品々の持つ、素朴で力強い造形美をご覧ください。

〔第3室〕注器 ―日本民窯から

土瓶・急須・片口・雲助など、かつての暮らしに欠かせなかった注器。各地の民窯ではこれらの器を、土地に根ざした材料や手法で生産してきました。用途に忠実に作られた無作為の造形は、使用による経年の変化も伴い、健やかで生き生きした姿を今日に伝えています。

〔玄関〕染付羅漢山水文皿（そめつけらかんさんすいもんさら）
明時代　17世紀前半　径28.0㎝

展示室2階



〔大展示室〕 カンタと刺子 ―ベンガル地方と東北地方の針仕事

カンタは使い古した白い木綿布を4–5枚重ね、色糸で絵模様を刺繍し、周囲の余白部分は白糸でさざ波のように刺し埋められています。

〔第1室〕朝鮮時代の文房具

朝鮮王朝では、後に「文筆の国」と評されるほど、多様な文房具が生れています。特に、水滴に見られる豊富な器形と模様は、朝鮮工芸の魅力を存分に表したものです。本展示室では水滴をはじめ、筆筒、紙筒や韓紙、硯や硯箱、文箱など、様々な素材で作られた文具と文房家具を展示します。

〔第2室〕芹沢銈介の仕事

当館の創設者・柳宗悦と出会い、民藝運動に加わった染色家・芹沢銈介（1895-1984）は、図案・型彫・染めを一貫して行う型絵染による、独創的な仕事を残しています。本展示では着物や帯のほか、和紙に染めた型絵染、私家本や装丁本など、芹沢の多彩な仕事を紹介します。

〔第3・4室〕カンタと刺子 ―ベンガル地方と東北地方の針仕事

東北地方の刺子にはこぎん、菱刺、庄内刺子などがあります。それらは丈夫で暖かく、模様も美しく、寒冷地の暮らしに彩りを添えました。

〔2階第1室〕総辰砂陽刻双鶴文水滴（そうしんしやようこくそうかくもんすいてき）
朝鮮時代　19世紀後半　幅8.3cm